

# LESSON 46

ご提示いただいた四半期財務データ（2022年Q1～2026年Q3）の財務比率分析結果をご報告します。

全体的な傾向として、「売上は順調に拡大しているものの、原価高騰等の影響で収益性が著しく悪化し、それを補うための借入増によって財務の安全性も急激に低下している」という深刻な状況が読み取れます。

主な指標別の分析は以下の通りです。

## 1. 収益性分析（プロフィット・マージンの悪化）

売上規模は拡大していますが、利益率の急激な低下により深刻な「増収減益」に陥っています。

- ・ 売上高総利益率（粗利率）：2022Q1の40.0%（総利益4,980÷売上12,450）から、2026Q3には26.0%（総利益6,864÷売上26,400）まで大幅に悪化しています。売上高が増加しているにもかかわらず、売上原価の増加ペースがそれを上回っていることが原因です。
- ・ 売上高営業利益率：2022Q1は14.0%（営業利益1,740）と良好な水準でしたが、販管費の継続的な増加も相まって、2026Q3にはわずか0.8%（営業利益204）まで急落しています。本業の稼ぐ力が極めて弱まっています。

## 2. 安全性・財務健全性分析（過剰債務の進行）

収益性の悪化を借入金でカバーしているため、財務の安全性が急激に損なわれています。

- ・ 自己資本比率：総資産は2022Q1の38,200百万円から2026Q3には78,300百万円へと倍増していますが、自己資本の成長は鈍く（18,500→21,700百万円）、自己資本比率は48.4%から27.7%へ大きく低下しています。
- ・ D/E比率（負債資本倍率）：2022Q1の時点では有利子負債は4,200百万円で、D/E比率は0.23倍と極めて健全でした。しかし2026Q3には有利子負債が23,500百万円まで膨れ上がり、D/E比率は1.08倍となり、有利子負債が自己資本を上回る状態（レバレッジの急拡大）になっています。

### 3. キャッシュフローと流動性（資金繰りのひっ迫）

利益の急減に伴い、現金創出力が弱まっています。

- ・ 営業キャッシュフロー: 2022Q1には2,150百万円のプラスでしたが、2026Q3には820百万円にまで落ち込んでいます。
- ・ 現金等の推移: 有利子負債を増やして資金調達を行っているにもかかわらず、手元の現金等は2023Q4の4,610百万円をピークに減少に転じ、2026Q3には2,050百万円まで減少しています。資金流出が続いており、資金繰りが厳しくなりつつあることが伺えます。

---

まとめ: 事業規模（売上高）は拡大しているものの、原価・販管費のコントロールが追いついておらず、利益構造が崩壊しつつあります。その結果、営業CFが減少し、不足する資金を借入（有利子負債）に依存するという悪循環に入っています。

これらの財務状況の悪化（売上高と営業利益の乖離、または有利子負債の急増など）を分かりやすく可視化するために、グラフ（インフォグラフィック）を作成しましょうか？